
このかとほのか

KMY

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

このかとほのか

【Nコード】

N5852E

【作者名】

KMY

【あらすじ】

中学生になったこのかとほのか。ほのかのげた箱に不思議な紙が、1日目は1枚、2日目は2枚、3日目は4枚と、日を重ねる毎に増えて行く。そんな中、次の週の木曜日に姜しょうが転入してくる。

(前書き)

この小説の最後の方に少々の性的描写が含まれています。ご了承ください。

自分は、すでに死んだと思っている。

自分は、つまらない小説しか書けないからだ。ゆえに、この「小説家になろう」に僕がいると他の皆の小説もつまらなく見えてしまうので、僕は撤退を決めた。自分は、自分は阿呆だと思っている。つまらない小説しか書けない変態だと思っている。自分は、自分を社会のグスだと思っている。

しかしながら、自分は、新たな妄想、言い換えればみんなに対する新しい嫌がらせを思いついた。したがって、その嫌がらせを、平然と皆の前に公表する。

これは嫌がらせではあるが、自分の妄想であることには変わりないので、500ポイントの評価をもらったら連載する。しかし、500ポイントなんで最初からありっこない。つまり、そういうことだ。変態の僕が、再びここにお世話になる義理はないということだ。しかし、熱意のあるコメントを投稿するならば、連載しないこともない。自分は、高慢な人間であるので、自分の高慢についている人に、アホの極みの役をお願いしたい。しかし、自分の高慢に耐えられる人に、自分の全てを教えたくはない。なぜなら、自分は意味不明なのだから。

自分は、自分の嫌がらせのためなら、平然と他の作品を盗作する。これも、盗作と理解して読んでいただきたい。

前

灰色の青空の下の灰色の草原に、一人の少年は立っていた。

雲の流れて行く灰色の青空を、少年は見上げていた。

周りは、灰色の山。少年は、その山をも、不満そうな顔をして見
ていた。

みなみ
「美南」

少年がその名を言うと、少年の後ろに控えていた少女は、うなず
いた。

「身分についてどう思う？」

美南は、ため息をついて言った。

「そうですね……」

美南の目からは、少々の涙が出ていた。

「父の命令には、さからえない」

「分かっております」

美南は、目からあふれている涙を抑えて、その少年の後ろ姿を眺
めていた。少年は、えっぐえっぐと泣いていた。

「今日から中学生♪今日から中学生♪」

黒髪の少女は、張り切った声で、道の真ん中をくるくる回る。そ
して、かばんを天に放り投げ、落ちてきたそれをがしつと受け止め
る。その少女の制服のスカートは、それにつられて、ふわりと浮い
た。

「見えるわよ」

その少女の隣で、眼鏡をかけた、いかにもまじめそうな少女がい
た。

「別にいいじゃん」

はしゃいでいた少女は、興冷めした。

「でも、公道では人がいるから」

「でも、学校の前だよ」

ぶーとおおを膨らまして、少女は言った。校門の前。たくさんの
男子が見ている。眼鏡の少女は、にらんで言った。

「かのんさん、いい加減そういうのはやめていただける？ みつとも

ないから」

かのんと呼ばれた少女は、眼鏡の少女をにらみ返す。

「それが何よ」

「何でもよ」

眼鏡の少女は、そのまますたと歩いて行ってしまう。

玄関で、かのんは、げた箱の取っ手に手をかける。重い。少し重い。

「今日もか」

かのんは、ためいきをついてげた箱を勢いよく空ける。ばああつと、はじけたように、たくさんの封筒が、狭き空間から噴出してくる。下に落ちた数多あまたの郵便物、いや消印が押されていないから郵便物ではないだろう、を拾い上げる。

「やあ、今日も告白？」

横から別な少女が声をかける。かのんは、黙ってうなずく。

「ほのかちゃん、手伝ってくれる？」

「あはは」

ほのかは、にっこりと言って、しゃがむ。

「今日もたくさんあるね」

ほのかがにっこりと言うと、かのんはむすっと、ほのかをにらむ。

「自分のげた箱、まだ見てないのに」

「あはは」

二人は、にこつと顔を見合わせる。

「小学生の時、学校第一と第二を争っていたからねえー、」

ほのかが言うと、かのんは力強く言う。

「中学生になっても、負けないから！」

「あはは、返り討ちにしてやる」

ほのかはそう言い、立ち上がって自分のげた箱の取っ手に触る。

「あれ？」

取っ手の感触がいつもより異常に軽いのに気付いて、ほのかは驚

いた。

「どうしたの？」

かのんが、顔を見上げる。

「ううん、何でもない」

どうしてなのよ。いつもはかのんちゃんみたいたくさん入っているはずなのに。ほのかは、不審に思ってた箱を開ける。

ひらりと、一枚の紙が舞い落ちる。ほのかは、その浮遊する紙をつかんだ。その紙は、ちらしのようなであった。

「・・・・・・・・ん？」

” 柏原ほのか氏 あなたを専属のメイトに任命します ”

B5程度の紙には、それだけ、小さな印字でぼつりと書かれていた。

「はぁ？」

ほのかの眉毛は、吊り上がる。

「ん？どうしたの？その紙？」

手紙を集め終えたかのんが、立ち上がってその紙を見る。

「なーんだ、真っ白」

「えっ？」

ほのかは、驚いた顔をする。

「文字、書いているけど？」

「えっ？書いてないじゃない」

「書いてるわよ、ほら、ここに」

「ほのかちゃん、どうしたの？大丈夫？」

かのんが心配な顔をするので、ほのかは、複雑な顔をしてその紙を折りたたんでポケットに入ると、はあっとためいきをつく。

「やっぱり、引きだったのかな」

家に帰ったほのかは、そんなつぶやきをして、ポケットに入った紙をくちやくちやにしてポケットに入れた。それから、机に座り、朝にもらった教科書を開いて、眺めはじめた。

その次の朝、かのんとほのかはいつも通り、玄関で出会う。

「昨日、1つしか来なかったんでしょ？それも真っ白！」

かのんがほのかをあざ笑うと、ほのかもむすつとして返す。

「だまだま、よ！」

ほのかはそう言って、いきおいよく自分のげた箱を空ける。

「……ん？」

ひらりと、2枚の紙が出て来たので、ほのかはその紙をつかむ。

二枚とも、同じ文面であった。

” 柏原ほのか氏 あなたを専属のメイトに任命します ”

「何、それ」

かのんがのぞくと、ほのかは言った。

「昨日と同じ」

「何も書いてない」

「わたしを専属のメイトに任命するって書いてある」

「え、どこによ」

「見えないならいい」

ほのかは、その紙をくちやくちやにした。

「どうしたの？」

そこを通りかかった眼鏡をかけた少女がたずねると、ほのかはぶいと言った。

「あれよ、あれ。わかる？ 田辺」

「はあ？」

田辺と呼ばれた、眼鏡をかけた少女は、しばらくほのかの顔を見ていたが、答えるつもりなしと悟ったのか、無言でそのまま通り過ぎた。それを見て、ほのかははあっとため息をついた。

「どうして、みんな、わたしのことを信じてくれないんだろう」

ほのかはそう言って、さっさと歩き出した。

「待ってよ！」

かのんも、ほのかの後を追う。

「昨日もおとといも、頭がおかしかったのかなあ」

ほのかは、そう言って、げた箱を開ける。4枚。同じ文面。ただ、陳列。

その次の日は8枚。

その次の日は16枚。

その次の日は32枚。

その来週の月曜日は64枚。

その次の日は128枚。

その次の日は256枚。

「ああ、もう！！」

木曜日のげた箱がなかなか開かないので、ほのかは顔を真っ赤にしていた。

「誰よ！どうせ512枚も入れたんでしょ！こんな小さいげた箱に！」

「手伝うよ」

かのんが声をかけると、ほのかは取っ手から手を離すと、はあはあのため息をつく。かのんは、取っ手に手をかける。ふわりと、取っ手があっさり開いたので、ほのかはびっくりする。

案の定、推定512枚と見られるその”手紙””ただの真っ白な紙”は、ほんと爆発するように、そのげた箱から出る。そこらは、白まみれになった。

「はあはあ・・・・・・」

ほのかとかのんは、しりもちをついてため息をついた。

「一体、何がどうなったのよ」

かのんが言うと、ほのかは、かたわらにある一枚の紙を、面倒くさそうに読み上げる。

「柏原ほのか氏 あなたを専属のメイトに任命します」

ほのかはそう言い、紙をかのんへ放り投げる。かのんは、その紙をつかむ。真っ白であったが、かのんは、あえてその事は言わなか

った。周りには、人垣ができていた。

後

その日の朝は、やげに賑やかだった。

「今日よ」

田辺がぼそりと言ったので、かのんは明るく言った。

「ああ、昨日先生が話してた転校生」

「あ、思い出した」

ほのかがにっこりと言ったので、かのんはほっとした。

チャイムが鳴ったので、それぞれ、自分の席に着席した。相変わらずスーツ姿の先生が、後ろに一人の少年を従えて、教室に入る。

先生は、教壇に立つ。それに合わせて、学級委員長の田辺が号令をかける。

「起立 礼 着席」

生徒達が着席すると、先生はくるっと黒板の方を向いて、ものを書き出した。

蓮本 姜”

先生はそう書いて、生徒達を向く。

「先週突然この街に引っ越して来た。蓮本姜。名前はキョウとも読むので間違えないように」

あこのひげをいじりながら、その先生は、姜に言った。

「さあ、自己紹介しなさい」

「はい、えっと」

その少年、姜は、そのかわいらしい顔からして、そのかわいらしい体つきからして、女子たちは皆、どきっとしながらお互いを見ていた。

「は、は、蓮本、姜です。え、ええと、よろしくお願いします」
照れているような顔だったのか、姜のほおは赤くなっていた。そんな姜の顔を見て、女子たちの興奮は絶頂に達した。

冷静な田辺は、立ち上がる。

「言葉、支えていませんか？」

あまりにも冷静だったので、女子たちは皆、田辺を見る。

「は、はい、あの、ええと……」

しどろもどろする姜に、田辺はにこつとして、優しく言う。

「わたしたちは1年は組です。こちらこそよろしくお願いします」

「ああ、そのセリフ……」

女子たちが田辺に向かってぎゃーぎゃー、日本語と思われる言葉をしゃべりだしたので、先生は怒鳴る。

「静粛に！」

女子たちは、一斉に静まった。

「さあ、一番後ろの席に座りなさい」

「はい」

姜はぼすりと言うと、教室の一番後ろまで歩いて行く。沿道の女子は、その香りを一生懸命にかいていた。

「転校生、かわいかったわね」

誰も歩いていない一軒家の連なりの間の下校の道で、かのんがるるるんとそう言う、ほのかにもこつと言う。

「うん、結婚しちゃいたいくらい」

「あはは」

かのんも、笑った。

「それにしても、げた箱の紙切れ、明日は絶対1000枚だよ、どうしよう……」

ほのかは、空を見上げながら、苦笑いをする。

「任命」

いきなり、二人の後ろから声がしたので、二人は驚いて後ろを向

く。後ろには、姜が立っていた。

「えっ・・・？」

「任命、と言ってるんだけど」

「何に？」

ほのかは、どきつとする。

「その顔は、心当たり、あるでしょ」

姜はそう言うと、ポケットから”紙切れ”を取り出すと、ほのかに示す。

「柏原ほのか氏、あなたを専属のメイトに任命します」

「はあ？」

姜は、有無を言わず、ほのかの腕をつかむ。足元が丸く白く光っているのに、ほのかも、かのも気付いた。姜は、強引に、自分の唇を、ほのかの唇へ押し付ける。

「は・・・・・・？」

かのは、それを見て氷になった。しばらくの間、二人は固まっていたが、やがて姜が唇を離すと、丸い円の光は消えた。

「は・・・・・・」

ほのかは、かのもと同じく凍っていた。

「な・・・・・・」

ほのかは、顔を真っ赤にしていた。

「い、いきなり何を、」

かのがやっとの思いで声をかけるが、姜は無視してほのかに言う。

「ほのかは、これから僕のメイト」

「な・・・ぜ？」

ほのかが言うと、姜はポケットから、茶色の小さな人の形をした人形を取り出す。

「な・・・何それ」

姜は、だまってその人形を、片手で揉みだした。

「ああっ・・・」

ほのかは、その場にばたと倒れた。

「痛い！痛い！」

ほのかは、その場にのたれまわった。

「ほのか！」

かのんがほのかの体へ飛びつこうとするが、姜は柔道の要領でかのんを押し倒す。その姜の顔は、冷酷な目であった。

「あっ・・・」

姜に押し倒されたかのんは、顔を真っ青にする。

「僕は、おっぱいが好き」

姜がいきなりとんでもない事を言い出したので、かのんはこおりついた。

「もっとも、中学生は貧乳群だけど」

「な・・・何を」

かのんは、大きな声で怒鳴る。

「ひ、人の体で遊んでいたの！今まで！」

「さあ。でも、貧乳もそれはそれで好みかな」

姜は、平然とした顔で、嫌がるかのんの胸へ、手をかけようとする。

姜は、いきなり吹っ飛んで、塀へ体当たりする。

「えっ・・・」

かのんは、上半身を起こす。

「た・・・田辺さん」

かのんの前には、田辺が立っていた。

「田辺さん」

ほのかが立ち上がってその名を言うと、田辺はぼそりと、姜に向かって言う。

「学級委員長として警告します。二度と、このようなことをしないでください」

田辺が気強く言うと、^お圧された姜は、ゆっくりと立ち上がると、田辺をにらむ。

「もう、しません」

「なら、早急はやきゅうにこの場を立ち去りなさい」

「はい」

姜は、かのんをにらみつけながら、その場を歩き去った。反省していない。絶対反省していない。かのんは直感でそう思ったが、田辺は、わなわな震えているそんなかのんに、声をかけた。

「どっちで怒っているかは分からないけど」

田辺は、数秒間を置いて、続けた。

「一人にかまっていたら、人生に嫌われるわよ」

「そ．．．．．そうね」

かのんも、少々落ち着いたのか、ゆっくりと立ち上がった。

「で、でも、わたしは．．．」

ほのかは、うつむきながら、自分の唇をハンカチでこすりながら言った。

「．．．．．最低」

「明日、特別会を開いて、そこで議論する。落ち着いて」

「はい．．．．．」

ほのかは、涙をすくう。

「行こう」

かのんがほのかに声をかけると、ほのかは、目の周りの涙を手の甲でふくと、にっこりと言った。

「うん．．．．．!」

二人は、再び歩き出した。その二人を、田辺は後ろから眺めていた。

「なぜ、邪魔をするのですか」

田辺の後ろから、姜の声がした。

「まだ行きすぎで、あんな事を繰り返してしまうかもしれないからです」

「うっ．．．．．」

姜の声は、もう、それ以上は出なかった。

終

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5852e/>

このかとおのか

2010年10月8日15時22分発行